

公益社団法人私立大学情報教育協会
令和2年度 第1回産学連携推進プロジェクト委員会議事概要

- I. 日 時：令和2年9月11（金）16：00～18：00
II. 場 所：私立大学情報教育協会（ZOOMによるテレビ会議開催）
III. 参加者：向殿委員長、大原副委員長、辻村委員、井上委員、酒井委員、青木委員、松本委員、
田辺委員、齋藤アドバイザー、吉永アドバイザー、渡部アドバイザー、河野アドバイザー、
青木アドバイザー、井端事務局長、森下

IV. 資料

1. 令和元年度の事業報告
2. 令和2年度事業計画
3. 令和2年度「産学連携人材ニーズ交流会」について（事務局メモ）
4. 令和2年度「社会スタディ」について（事務局メモ）
5. 令和2年度「大学教員の企業現場研修」について（事務局メモ）

参考資料

- ① 日本の競争力34位、企業の課題（日経産業新聞2020.9.9）
- ② ポストコロナにおける大学教育のDX化と数理・データサイエンス・AI教育
- ③ 仮想キャンパスによる産学連携イノベーションラボの提案
- ④ 大学と社会が連携したデータサイエンス・AI教育の取組みアンケート（滋賀大学）
- ⑤ 大学と社会が連携したデータサイエンス・AI教育の取組みアンケート（早稲田大学）

V. 検討内容

1. 令和元年度の事業報告と令和2年度の事業計画について

事務局より令和元年度の事業報告及び、令和2年度の事業計画について以下のように報告された。

(1) 令和元年度事業報告

① 産学連携人材ニーズ交流会

AIを使いこなす人材育成をテーマに計画し、大学関係者72大学96名、企業関係者18社30名、合計126名の参加者申込があったが、新型コロナウイルスの感染が拡大していることを踏まえ、開催を中止した。中止連絡に際して、10数名から時宜を得たテーマなので改めて実施して欲しいとの意見が寄せられたが本年度のテーマに含めて検討したい。

② 大学教員の企業現場研修

新型コロナ感染の影響が出る中、ぎりぎりのタイミングで協力企業にも特別の配慮・協力をいただき実施し、参加者からは好評であったが、新型コロナの影響で例年より参加者が減少した。

③ 学生による社会スタディ

2月初旬で新型コロナ感染の影響が出る前に実施でき、テーマ、内容について、参加者から高い評価を得ることができた。※参加者アンケート参照

(2) 令和2年度事業計画

① 産学連携人材ニーズ交流会

イノベーション人材の育成を目指して、大学と産業界・地域社会を組み入れた「大社接続」の仕組みや協力内容の方向性について、情報専門教育分科会から報告を受けるとともに、AIを活用して社会の仕組みの変革に取り組む企業から大学教育に対する人材育成の要望・意見を聞き出し、社会的資源を大学教育に活用するオープンイノベーションの戦略について理解の共有をすすめる。

② 大学教員の企業現場研修

教員の教育力向上を支援するため、賛助会員の協力を得て情報産業における事業戦略の動向、社員教育の体制、若手社員を交えた大学教育に対する要望などについて意見交換し、授業を振り返る気づきの機会を提供する。

③ 学生による社会スタディ

学生が IoT、ビッグデータ、AI、ロボットなどによるデジタルトランスフォーメーションに興味・関心を抱き、イノベーションに関与する姿勢を醸成できるよう支援するため、国立・公立・私立の大学1・2年生を対象に社会の有識者及び大学の学識者との意見交流、学生同士による対話を通じて、早い段階からイノベーションに向けて主体的な学修行動につなげられるよう気づきを支援する。

2. 令和2年度の産学連携事業の進め方について

(1) 産学連携人材ニーズ交流会

<開催の考え方について>

昨年度の開催中止に際して10数名から時宜を得たテーマなので改めて実施して欲しいとの意見が寄せられたことから、昨年度のテーマも含め、以下のような新しい視点を踏まえて企画することにした。

- ① 「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」を受けて、異なる分野の学生や社会人を交えて多面的に知識を組み合わせ、談論風発を繰り返す中で知恵を創り出す学修者本位の学びの仕組みを加速していく必要があり、対面による物理的空間の学びに加え、時間・場所を越えたサイバー上の仮想空間とマッチングし、多様な「知」との新結合を目指す新しい学びのスタイルについて考える必要がある。
- ② 今、正にコロナ禍の中で遠隔授業の有効性と可能性を体験しているが、これを機に最良の仮想空間による学修環境を整備して、学生が物事の本質を見極める意識を持って主体的に行動し、協働で創造的知性を引き出す教育のICT変革、大学教育のDX化が喫緊の課題となっている。
- ③ そこで、今回は「教育のデジタル変革」をテーマに、分野を越えた専門知の組合せ、文理横断的なカリキュラム、学修の幅を広げる工夫について、産学が連携した新しい学びの仕組みを考えることが必要になる。

以上を踏まえて、「国際競争力の低下」、「コロナ禍における教育」、「大学教育のDX化」、「AIを使いこなす力」などをキーワードに産学が連携した新しい学びの仕組みを考えることにすることにした。

<開催方法について>

新型コロナの感染拡大の収束が予想できないことから、オンライン(ZOOM)で情報提供を行い、その後でオンライン(ZOOM)で全体討議を行うことにする。

<プログラムについて>

1. 情報提供

参考資料1の日本の競争力、「国際的に通用する人材育成」も踏まえて以下の内容で企画することにした。

情報提供-1 文部科学省が今後進めようとしている教育のデジタル変革の構想を説明いただく
テーマ 「ポストコロナにおける大学教育のDX化と数理・データサイエンス・AI教育」
服部 正 氏 (文部科学省高等教育局専門教育課企画官)

情報提供-2 企業サイドから産学連携による教育イノベーション構想を説明いただく
テーマ 「仮想キャンパスによる産学連携イノベーションラボの提案」
野村 典文 氏 (伊藤忠テクノソリューションズ(株)エグゼティブプロデューサー)

情報提供-3 大学と社会が連携したデータサイエンス・AI教育の取組みを紹介いただく
③-1 滋賀大学の取組み事例
③-2 早稲田大学の取組み事例

情報提供-4 教育のデジタル化について日本大学から以下の最新の方向・事例を紹介いただく。
観測とシミュレーションを融合した Digital Twin の技術は今後、価値を生み出す核
となると言われている中で、教育のデジタル化の事例として日本大学の事例を紹介いた
だく

※ 次回委員会で青木委員から概要を紹介いただく

2. 全体討議

教育のデジタル変革について認識を共有した上で、「AI を使いこなす人材育成」について、大学
と産業界・地域社会を組み入れた産学連携の方向性と課題について「情報専門教育分科会」から報
告を受け、教育のオープンイノベーションについて理解の共有を図る。

3. 開催時期

2021年3月で計画する。

(2) 学生による社会スタディ

令和元年度は、会場参加 18 大学 42 名、ネット参加 12 大学 30 名、計 72 名が参加し、添付のアン
ケートのように内容的には「期待通り」、「ほぼ期待通り」で 98%、役立ったプログラムでは、有
識者の情報提供が 83%、他大学の学生との意見交流が 12%と非常に高い評価が得られた。

<本年度の「学生による社会スタディ」について>

アンケートに見られるように参加者からは非常に好評であるため、本年度も何らかの方法で実施
を考える必要があること。こういう時にこそ学生を支援する意義があること。有識者からの学生を
励ます情報を提供することに意義があることから、今後のコロナウイルスの状況、などの不確定な
要素があるが、募集のタイミングとなる 11 月には最終決定する方向で、現時点では、感染防止の観
点からオンラインによる開催を前提に以下の内容で計画することにした。

① オンライン環境

私学会館などを配信会場にして「ZOOM」によるオンラインで行う。

② 参加学生の準備

自宅・大学のパソコン、インターネット環境を用いて参加いただく。

※ 必要な条件、パソコン、インターネット環境、技術サポートのレベルなどを明示して参加
者を募集する。

※ 各大学で遠隔授業の環境構築が進んでいるので、事前の確認（接続テスト）や技術サポー
トなどについては行わない。

③ 情報提供と気づきのグループ討議

オンラインで有識者から情報提供と意見交換を行い、グループ討議については、ウェブナー
又はブレイクアウトルームなどの方法で行う。

④ ネットトラブル、受信障害等の対策

ネットトラブル、受信障害などに備えて、情報提供と意見交換の内容を終了後に見られるよ
うにするが技術サポートなどについては行わない。

<有識者（候補）について>

昨年度のアンケート、「学びの成果物」で非常に好評であったテーマ、有識者を候補に検討する。

※ 本年度は、コロナ禍での新しい学び方、コロナにどう立ち向かうかなどについても各有識者に触れていただく。

有識者1 須藤 修 氏（中央大学 国際情報学部教授）

「さあチャレンジを始めよう “未来は君たちの手にある” -AI と社会イノベーション-

※ IoT や AI などデジタル技術をベースに産業や社会の在り方は大きく変わろうとしている。インド、中国、米国などでは新しい発想によるイノベーションやスタートアップ（起業）が桁違いの生産性向上や新たな消費をもたらしている。これからの社会を変えていく主役は従来にとられないイノベーションにチャレンジする君たちである。

有識者2 小西 一有 氏（合同会社タッチコア 代表 九州工業大学客員教授）

「価値を創り出すイノベーションとは」

※ デジタル革命が進展していく中で成功するには新たな価値を生み出す様々なイノベーションが求められている。今まで日本が得意としてきた「問題解決のイノベーション」だけでなく、「モノからコト」へのような人々の生活の豊かさや幸せ感をもたらす「意味のイノベーション」が避けられなくなっている。

有識者3 大原 茂之 氏（東海大学名誉教授 株式会社オプテック会長）

「AI を使えるようにする」

※ 知識の量や与えられた課題をこなす能力では AI に勝てない。様々な条件の中で自分たちの解を模索する思考力・実践力を通じて社会を変えていく学びの必要性を紹介する。

<スケジュール>

- ① 有識者の選定、開催方針、開催要項決定 → 2020年10月 第2回委員会
- ② 開催要項発送、参加者募集 → 2020年11月

(3) 大学教員の企業現場研修

昨年度は延べ67名の大学教員が参加し、参加者のアンケートでは非常に好評で、事業継続の要請が多く寄せられているが、新型コロナウイルスの感染拡大の収束が見通せないこと及び企業の受け入れ体制の負担を考え、本年度は実施を控えることにした。

3. 次回の日程について

次回の委員会は令和2年10月23日（月）16:00~18:00とした。